

エンカウンター (ENCOUNTER)

第266号

2024年6月1日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.wjg.jp>

小西芳之助導源先生「ガラテヤ人への手紙講解説教」より (11)

「福音」という言葉は、パウロが製造した

ガラテヤ書は、21回にわたって詳しく説明致しましたように、第1, 2章において、「福音の性質」を論じ、第3, 4章、詳しく言えば第2章の後半から、第4章にかけて「福音の内容」を明らかにしたわけであります。最後の5, 6章では、「福音の効果」と申しますか、福音の実、福音のご利益について述べております。即ち、明瞭に三つの部分に分かれております。そもそも

「福音」という言葉は、パウロが60回用いている言葉でありまして、他の場所では16回しか出ておりませんので、多分この「福音」という言葉は、パウロが製造した言葉と思われまます。パウロ自身が製造したこの「福音」という言葉により、「福音の性質」「福音の内容」「福音の効果」について、全く、福音それ自身について述べたのがこのガラテヤ書であります。我々は、ガラテヤ書を知らずして、キリスト教の信仰を論ずべからざるものであります。

ガラテヤ書大観——第1、福音の性質

福音の性質は、第1章1節に書かれているように、人々からでもなく、イエス・キリストを死人の中からよみがえらせた主なる神によっている。ここに我々の信仰の難しさと易しさとがあります。神とキリストによっておりますから、人間の努力、研究、求道によっては達し得ないという難しさがある。それと共に、神から来ているものですから、信仰をもって直ちに受け入れられる、万人が受けられるという容易さがあります。これが「福音の性質」であります。

第2——福音の内容

内容を一言で言えば、第4章後半、ご自身を我々の罪のために捧げられたこととあります。キリストは自身を捧げて、万人の贖い主となられた。罪を贖って下さった、これが「福音の内容」であります。他の言葉で言えば、贖い、罪の赦し、ということとあります。「福音の内容」は罪の赦しですから、罪ということが分からなければ分からない。例えば、豆腐を食べる時に、豆腐がどういうものであるかが分からなかったら、食べる意味がない。多くのクリスチャンは、キリスト教会に来ていて、ぼやっとしていて、福音の何たるかをはっきり分かっていません。罪が分からなければ、罪の許しがわからないのは当然であります。…

この教会では永遠の生命を説く

この教会では、罪の赦しだけを説いています。これに興味のない方は、この教会に無関係です。そうですから、このパウロの発見、即ち、律法によって永遠の生命を勝ち取る者は一人もいない、という発見によって、パウロは福音が分かった。キリストが十字架について我々のために義となって下さった、ということを受け取って、パウロは救われたのであります。

「救われる」と言うことは、罪が許されて、神の子として、永遠の生命を頂くことです。永遠の生命は福音の目的であります。この教会では「永遠の生命」を説きます。永遠の生命を得て、どういうことをするか、それは諸君の勝手です。ここでは、どういうことをするか、を説いてはおりません。あるいは自分の職務に専心するのもよかろう。ここでは、どういうことを為せとは言いません。永遠の生命を説きます。

イエス・キリストの罪の赦しを信じて生きる

「わたしは、神に生きるために、律法によって律法に死んだ。私はキリストと共に十字架につけられた。生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである。しかし、わたしがいま肉にあって生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神の御子を信じる信仰によって、生きているのである。」(ガラテヤ書 2・19, 20)

この2節において、過去、現在、未来のキリスト教の信仰の生活が書かれています。キリストの贖いを信じた時に、古き自分はキリストと共に十字架につき、死んだ。罪人である自分は死んだ。この 20 節は現在形で書かれておりますが、これは「未来」です。我々が復活した時に、はじめてキリストが我がうちに生き給うのであります。次は「現在」。自分が肉体をもって生きているのは、私一人（一人称単数）を愛し、私一人のために自身を捧げられた神の御子を信じる、その信仰によって生きているという。私は、この教会で、イエス・キリストの罪の赦しを信じて生きる、ということを教えています。…イエス・キリストの贖いを信じて生きていてくれれば、それでよい。この高円寺東教会は満足しています。「未来」は、キリスト来給う時に、我々のうちにキリストが生き給う。我々は、キリストと同じ復活体を頂くのですから。確かに起こることは、未来であっても現在形で言ってもよい。

「福音」、「よき知らせ」

人類を導くような偉大なる教師はそのような難しいことは言いません。自分の出来ることを言っています。ガラテヤ書の中には、福音を信じる者はみんな救われる、と書かれた場所があります。仏教でも、念仏を信じる者は十人が十人とも、百人が百人とも、みんな救われるという言葉があるのを思い出します。十字架の言葉を信じる者は、みな救われる。我々は善行を必要としない。キリストを信じるだけで、みんな救われると書いてあります。これを「福音」、「よき知らせ」と言います。

道徳というものは福音に反しているか、というと、そうではない。律法・道徳があるから、人間は自分が罪人であることが分かるのであります。罪を知らしめて、人を十字架に追いやる、そういう働きを持っています。我々が道徳と真剣に取り組む時、道徳が我々を福音に導いてくれるということが分かります。従って、道徳と福音とは同じ線上にあります。相反していない。道徳の上に福音が乗っています。そうですから、福音が分かり、永遠の生命を頂いたなら、道徳的になります。これが「福音の内容」です。

第3 福音の効果

「福音の効果」は、永遠の生命を頂くことであります。福音の実、目的は、我々に永遠の生命を与えること。受けたらどうなるかと言えば、神の子とされて、永遠の生命が与えられる、ということです。他の言葉で言えば、天国へ行くということ、福音を信じれば天国へ行く者となる、ということであり、これが目的です。この教会で福音を聞いて、自分はこの世の生活が終れば天国へ行く、ということが分かれば、この教会では卒業生。私は、それ以上を要求してはおりません。何をしてもよろしい。自分が天国へ行くことが本当に分かったならば、戦争に行くこともよい。戦争で人を殺すことは、私は嫌いですが、神の意思に沿っているとすれば、それもよい。それは本人に任せればよい。これが人格の自由であります。信者となったら、あれこれをせよ、しなければならぬ、というようなことはありません。各人の仕事は違う。学者は学問をする。実業家は事業をする、牧師は勉強したらよろしい。私はそう思います。学問も伝道も同じことです。

天国へ行く望み

我々は悲しみに耐えずに、ふらふらしているのは、天国の望みがはっきりしていないからであります。天国の望みがはっきりしたならば、我々は聡明になる。健康になります。ここでは、天国の望み以外を要求していません。

もし天国へ行くという望みがなければ、この教会は君達にとって興味はなくなる。これははっきり言っておきます。教会に来ることをやめたらよろしい。自分はこの世において偉い人になりたいと思っている人は、ここへ来ても駄目です。偉いことをせよ、といわずに、天国へ行くような人になれ、と言っているのですから、筋が違っています。ここでは、餅を出しているのですから、アイスクリームを求めて来ても駄目です。ここは餅屋です。アイスクリームは売っておりません。人は天国には興味がない。しかし、これが本当に分かったなら、この世において恐ろしいものはなくなります。その時、君たちの希望が達せられる。希望を達する力が与えられる。ペテロ、ヨハネは、無学の唯人であったが、自分の前に置かれた義務を行なう力を持っておりました。力が問題。君達は、無い袖は振れません。これが「福音の効果」であります。

天国へ行く信仰

福音とは何か、福音と律法との関係とは何かということは、現在でも「宗教と道徳」という問題であり、人類のある限り、永遠不滅の問題と思います。そして、福音によって宗教の奥義を知ることが出来ます。パウロは「福音は律法を堅くする」と言いましたが、これは実にパウロの名言であると思います。我々にとって、信仰プラス行ないと言うことがいつも問題になります。行ないが救いの条件となると、信仰がぼやけてくる。信仰があるかないかとなって来ます。キリスト教の歴史においても、このために信仰がぼやけて来ています。信仰がぼやけて来るときに我々の力がなくなって来る。論より証拠です。本当に我々が天国へ行く信仰を持った時に、我々の望みがはっきりします。その時、我々に「力」が与えられる。聖霊によって力が与えられる。

福音の真理性

最後に私は、信仰、福音の真理性について語りたい。

福音は一見迷信のように、一見馬鹿らしく見える。聖霊を受けない者にとっては、信仰は愚かなものように見える、とパウロは言いました（コリント前書第 2 章）。私は、福音が神の知恵であるという理由として、二つのことを言いたい。

一つは、万人に可能である、ということであります。もし少しでも道徳を条件とすれば、万人に可能であるとは言えなくなる。これが福音の真理性の一つの証明になると思います。他の一つは、神の啓示、神の方法に対して人間が従うこと、神の御旨に従うことになる。「神の御旨に従うこと」これが深い真理であると思います。パウロは、ロマ書の初めにおいて、「信仰の柔順」という言葉を使いました。我々は自分自身の意思を振り回して、神の意思に従わない。これが人間の常です。しかし、福音を「そうか」と言って受け入れることは、神の絶対の意思に従うこととなります。

恵み

最後の第6章18節では、次のように述べました。

「兄弟達よ。私たちの主イエス・キリストの恵みが、あなた方の霊と共にあるように、アアメン」と。

原語では、「恵み」という字が初めに来ております。度々言うように、ギリシア語では最初の言葉に最も重点が置かれています。「主イエス・キリストの恵み」これが福音です。イエス・キリストが我々のために十字架にかかり、我々に永遠の生命を与えたこと、これが「恵み」です。神の恵み、というよなぼやっとしたものではありません。次の強調点は、最後の「兄弟達よ」という字です。ルッターはこれを「愛する兄弟たち」と訳した。これは誤訳でなく、新訳です。それから、「あなた方の霊と共に」とあります。キリスト教の救いは、「行ない」ではない。偉い大事業でもありません。「霊と共にあること」であります。このために、青年たちに魅力がないという証拠であります。信仰というものは隠れています。福音は静かに隠れているものであります。この「霊と共に」という字の意味は誠に深いと思います。

パウロのガラテヤ書最後の言葉

私は、ガラテヤ書について、貧しい講義を致しました。ルッターはガラテヤ書の註解を終るにあつて、「自分は簡単にして、粗略なる註解を加えた」と序文に書きました。そのルッターの註解書が、世界で最高の註解書となっておりますけれども、私の貧しい註解は、ルッターのものと比べて、あるいは間違つて伝えているのかも知れません。しかし、聖霊なる神が、私ならびに諸君に、この意味を正しく理解させてくれることを望みます。最後に、パウロ先生自身が最後の 18 節に言われた言葉をギリシア語で諸君に送りたいと思います。日本語では非常に弱く訳されています。

ギリシヤ語の 6 章 18 節 (略)

「兄弟達よ。私たちの主イエス・キリストの恵みが、あなた方の霊と共にあるように、アアメン」

以上で、ガラテヤ書の大観を終ります。